キノボリトタテグモの習性

小　村　忠　夫

大阪市都島區高倉町一ノ一七七七

昭和18年8月24日，奈良公園にて採集したキノボリトタテグモ *Pachylomerus fragaria* Doenitz 成♀一頭を其後飼育したところ，習性の二三を知り得たので其結果を不完全乍ら御報告することゝした。始めに當り貴重な文獻及び御助言を賜つた八木沼健夫氏に深甚の謝意を表する。

住居：異常營巣

種々の樹木或ひは岩石が苔類に被はれてゐて少し濕つぽく感じるやうな寧ろ日陰の場所に往々該種の住居を見出すことが出來る。本州中部以南，九州地方にかけて分布する該種は，寧ろ稀薄な存在ではなく，只其環境に酷似した住居の外裝は，我々の目を充分欺くに足るものであり，從つて採集し難いものである。袋狀の住居には斜に半圓形或ひは圓形に近い戸蓋が附いて居り，戸蓋の開閉は常に樹皮や岩石の反對側に附いてゐる蝶番を以て行はれる。戸蓋は大抵下向であるが，往々上向のものも見られる。該飼育種も採集時には上向の戸蓋を附してゐたものである。袋の長さは約1.5〜3cm. 口徑約 0.7〜1cm. で戸蓋は一重，二重，三重等種々である。住居外部は苔や樹皮を以て被はれるが，苔は住居上に於ても充分生育する。內側は平滑に絲を以て造られる。

8月25日，直徑 11cm. 高さ 14cm. の廣口瓶に約 5cm. 許りの深さに濕つた砂を入れ，其上へ苔類のはびこつた杉の樹皮を適當な大きさに折つて入れ，シャーレーで蓋をした簡單な飼育瓶の中へ該種一頭を入れて置いたのであるが，其の翌朝，住居作成中の様子が見られた。盛に杉の樹皮や苔の微細な一片を執

へて來ては，其れを繼合さんとする部分に置き，直ちに後向をしてから絲疣を左右交互に動かしつゝ繼合せて行く。未だ完成してゐない戸蓋を出ては又住居の繼足す部分へ巧みに切り取つて來たものを附着させ，同様な動作を繰返す。此の時，戸蓋を出ると云つても，住居より全身を現すことは先づない。多く出たところで腹部の前端を僅かに覗かせる程度であつた。午前十時頃，住居は完成したが，戸蓋は上向の異常型で，杉の樹皮と飼育瓶側壁との大層狹い間隙に住居內部の蜘蛛の行動が幸ひにも飼育瓶の外から觀察出來るやうに，恰も正常な住居の側壁を僅か許り縱に引裂いた如きものを造つてゐたのである。勿論之は餘りに狹い間隙に住居作成を行なつた事故，飼育瓶の側壁が邪魔になつて其住居が袋狀をとり得ずかゝる結果になつたものと思はれる。住居作成中は大層敏感であつて，極めて僅かの震動に對しても即時作業を中止し，時には五分以上も靜止することがある。住居作成に就ては其の詳細を追て御報告しようと思つてゐる。

內 部 運 動

筆者は其後數日間，此の內部觀察に都合のよい異常營巢內に於て，蜘蛛が平常如何なる位置をとつてゐるかを觀察することが出來た。此の蜘蛛は常に住居內に於て第一步脚，觸肢で戸蓋を引いてゐるのではなく，どうやら身に危險を感じたらしい時にのみさうするのであつて，平常は戸蓋を持つ時の向き（蝶番の方向へ腹面を向ける）にではなく，むしろ其の反對の向き（蝶番の方向へ背面を向ける）で袋の底部に近く極めて安樂な樣子でゐる場合が多い。其の樣な時に，若し戸蓋を何かで突くとか，住居を震動させるとか，住居に指を觸れるとかすると，直ちに戸蓋に近づき廻れ右をして蝶番の方向に腹面を向ける姿勢をとり戸蓋を引く。其動作は非常に敏捷である。餌が觸れた場合には戸蓋を引くどころか，却つて僅かに開けて住居外部の樣子を伺ふ。數日間，餌を與へずに抛つて置く時にもさうする。强ひて戸蓋を開くと常に住居の底部に潛んで終ふ。住居に觸れるといふ點に於て，餌か筆者の惡戯か其の何れであるかが極

めて明かに區別出來るものである。如何に餌が觸れるかの如く僞つても，簡單に見破られて戸蓋を固く閉ぢて終ふものである。

食　　性

9月1日，蜘蛛は異常型住居に厭いたものか，今度は下向きの完全な住居を營み，其處に棲まふことゝなつた。如何なる餌の捕獲法を爲すかを明かにすることが，筆者の飼育觀察の目的であつたのである。最初に蜘蛛が餌を捕獲したのは其の徘徊中に於てであつた。9月2日午後4時頃，完全に死滅したシマバヘ一頭を飼育瓶中に住居より離れた砂の上に投入れて置いたのであるが，夕闇迫る頃（午後6時50分）ふと見ると入れて置いた筈のシマバヘが見當らない。さては，と戸蓋を開いて伺ふに案の狀捕食の最中である。住居の內部へ潛み，第三第四兩步脚は伸したまゝ，觸肢と第一第二兩步脚で餌を抱き乍ら捕食してゐるのである。再三其後數日間同樣な事を觀察したが，何れも殺してから間もないハヘ類であり，（菌類が發生したり，餘りに古いものは捕食しない）何れも夕暮から夜間にかけてであつた。乃ち蜘蛛は夕暮か又は夜間，住居を出でて徘徊し餌を漁つて夫を持歸り後食ふといふ性を持つてゐるのである。

其後，筆者は此の住居が單に身を保護する爲にあるものか，ヂグモの如く袋巢に賴つて狩獵するものか，其他出漁徘徊以外に餌の捕獲法はなきものかといふ點を明かにする爲，9月8日午後8時頃，*Evophrys nipponicus* Kishida ネコハヘトリを捕へて飼育瓶中に入れ，ピンセツトで追ひ乍ら其の住居上を步かせてみたが，何の反應もなかつたので出漁徘徊のみによつて狩獵するものであるとしてしまつたが，猶念の爲にと思ひ，其翌日から每夜同時刻頃同樣な觀察を度々試みてゐるうち，同月14日待望の捕獲法が觀察出來たのである。住居上を戸蓋の方へ步ませて行き，恰度戸蓋を通過した直後のことであつた。パツと戸蓋が開いたと思ふ間もなく突然捕獲が行はれたのである。捕へたと思つた瞬間，既にネコハヘトリとトタテグモの姿は見られなかつた程，實に驚歎すべき美事な早業であつた。此の時，半身を躍らせてネコハヘトリの頭胸部側面附近を

嚙んだキノボリトタテグモが夫を忽ち巣中に引張り込んだのと，其時ネコハヘトリの體が斜に傾いた爲に見えた黄白色の腹部とが，夢のやうに記憶されてゐるに過ぎなかつた。ぐぐぐぐ……と，觸肢，第一歩脚で引寄せるのであらうか，戸蓋の中央が凹む位密閉された。其後，ネコハヘトリを與へて此の觀察を繰返したが，夜間晝間の區別なく成功した。但し空腹を感じてゐるのか戸蓋を僅かに開き，内部から蜘蛛が獲物を待ち構へてゐる樣な場合に，しかも，住居が少しでも震動すると戸蓋を固く閉ぢて終つて餌の捕獲は決して見られないので，ネコハヘトリを上記の如く追ふ際にピンセットで飼育瓶中の苔や樹皮其他一切のものに觸れずに行つた場合に限つてである。猪山本隆氏（1943）が，*Kishinouyeus typicus* Kishida キシノウヘトタテグモについて餌の捕獲を觀察された如く，ネコハヘトリを住居に觸れぬやうに單に戸蓋近くへ追ふ場合に於ては，今迄のところ捕獲は見られない。要するに餌の捕獲は，夜間か夕暮徘徊して行はれる場合のみならず，晝夜を問はず住居上を餌が歩み戸蓋を通過した直後に行はれるのである。ルリハムシを與へたこともあつたが，體が强固であり滑かな爲か，半身を躍らせて跳び着き獲へんとはしたが逃して終つた。捕獲することに失敗すると，身に其後の危險到來を恐れてか直ちに住居の中へ潜んで終ふ。此の蜘蛛が食餌として如何なる動物を捕食するかは，多くの種類にわたつて未だ調査してゐない。

食　　滓

餌を食べ盡した後は，必ず食滓を住居外へ捨去りに行く。住居の附近に捨去ることもあるが，住居より程遠い處へ持運び捨去ることもある。此の動作は夜間行はれるのである。晝間は決して住居外に出る事なく，夜間上述した如く出漁の必要を感じた際とか食滓を捨去る際とかに徘徊することは明かである。

脱　　糞

脱糞は主として夜間行はれるらしく，現場を見届けず未觀察の儘であるから確かなことは無論云へないが，飼育瓶の側壁上方には黄褐色か褐色の排泄物が

どうやら住居から出ずに，大體定まつた位置より，定まつた方向に腹端を向けて上方に射出するのではないかと考へられるやうな處に附着してゐる。上方に向つて射出することだけは確かである。

要　　約

1. 平常は戸蓋を引かず，袋の底部に近くゐる。
2. 外敵に襲はれた時，住居が震動した時等には戸蓋を引く。
3. 餌が觸れた際，數日間餌を與へずに捨置いた際には戸蓋を僅かに開けて外部の様子を伺ふ。
4. 强ひて戸蓋を開く場合には袋の底部に潜んで終ふ。
5. 夕暮より夜間にかけて徘徊し餌を漁る。
6. 生きてゐるものは勿論，死滅した蟲をも食ふ。
7. 住居上を歩いた餌が戸蓋を通過した直後半身を躍らせて之を捕獲し直ちに住居內に入る。
8. 住居より餌を襲ふ場合は晝夜を問はず行はれる。(キシノウヘトタテグモについては夜間のみ觀察されてゐる)
9. 住居より餌を襲ひ捕獲に失敗した場合には其の跡を追はず，直ちに住居の內へ潜んで終ふ。
10. 食滓は住居より出でて，捨去りに行く。
11. 脫糞は上方へ射出して行ふ。

文　　獻

植村利夫 1933 カミガタトタテグモ 理學界 Vol.31, No.5.
植村利夫 1937 キノボリトタテグモの分布 Acta Arachnologica Vol.2, No 3
齋藤三郎 1938 ワクシトタテグモ 日本動物分類 眞正蜘蛛類
田中正行 1938 大阪府にて發見されたトタテグモ 我等の自然 Vol.1, No.1
八木沼健夫 1940 大阪府の蜘蛛 1 我等の自然 Vol.1, No.2
藤田衞 1940 キノボリトタテグモ裏日本福井縣に產す Acta Arachnologica Vol.5, No.4
山本陸 1943 トタテグモ 蜘蛛の觀察
紬野善熙 1943 蜘蛛の習性